

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

## ふるさと「風」

第十七号（二〇〇七年十月）

ふるさとをどう想い、どう表現する

近藤治平

『命あるものには、時の移ろいの中にそれぞれの物語をつくって在る。それを囁くのはふるさととの風。伝えるのもふるさととの風』

これは「ことは座」十二月公演のために書下ろした脚本の最後の部分の台詞である。

女優小林幸枝さんの「怨みだとか怨念といった話を演じてみたい」という要望に応じて書いた物語である。物語のモチーフにしたのは、菫蒲沢に出来た「薬師古道」である。百五十年ほど前の時代を想定して書いたものである。ここではその物語を紹介することが目的ではないので省くが、薬師堂とその下にある小さな弁天池を見下ろす場所にあった山桜の古木が、古道を作るために切り倒されたことを題材に書いた堂守りの老女の告白物語である。

古道と称して道を拡張するために山桜の古木を切り倒したことへの個人的な嘆きを、勝手な想像でよくある女の告白劇に仕立てたものであるが、ふるさとを想い、表現をした話にはなっていると思う。

小林さんと「ことは座」を起こして丁度一年になり、この一年間は、小林さんが演じるため

の脚本だけを書いてきたが、このふるさと風の会の会員で小林さんがただ一人、石岡生まれ石岡育ちで、いわゆるこの国の人である。だから変な理屈であるが、小林さんのために書いた文章は、その内容はどうであれ全てがふるさとを想いふるさとを表現する文章であると思う。

小林さんは、聴覚が全くない障害者であるが、彼女のサインランゲージ(手話)に話す言葉の表現の中に、舞台表現におけるスモール感を見出し、手話を基本とした朗読舞、朗読舞劇といつ全く新しい舞台表現を創出して、俳優さんとしてふるさとを表現してもらっている。

この「ふるさと」風「はふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える」といつことを頭の片隅に置いて、夫々の思いや考えを文といつ声に表現して行こうと始まった雑文紙である。

打田さんのように、一生懸命歴史を掘り起こして物語として書く人もいれば、一生懸命ふるさと自慢を書かれる兼平さんもある。また日常の暮らしの中の雑感、雑想を書かれる小林さん、伊藤さんもある。何れも常世の国といつふるさとにあつて自分を文に声している。だが「この私は」といつと些か答えに窮するものがある。だから、小林さんといつこの国に生まれ育った女優さんが表現をするものを書いていくからふるさとを表現している

と理屈をつけているのである。しかし、これでは余りに自分を卑屈しているのでもう少しふるさとについての思いを書いてみよう。

これは生物学の話であるが、実は文化そのものの話にも繋がるものがある。

生物の進化は、突然変異によって成されるのであるが、その進化の歴史は、スライラル化になって繋がっていくのだといつ。人間が母親の胎内に生まれた瞬間から、十月十日の間に、生物の進化の過程をスライラルに駆け上りオキヤアとこの世に誕生するのだといつだ。

人間もこの先、進化を続けるのであるが、その進化は突然変異がないと成されないのだといつ。突然変異といつ進化の先導がなくなったらそれが進化の極大化点であり、そこで絶滅するのだといつだ。

人間の暮らしに直結している文化も当にその通りである。文化の突然変異とは、既成を突き破るといつことである。この既成を突き破るといついわば突然変異がないと継承だとか、伝承といつことがなくなってしまう。

新人賞の審査を担当することがあるが、読みながら先ずみるのが、書かれた物語の感性に既成を打ち破る力を持っているかどうかである。そして、その力が伸びていく力を持っているかどうかである。文章力(文章の上手下手のこと)をなどは殆どみない。

「この突然変異といえる既成を突き破るものがないと新しい世界が生まれないのである。新しい世界が生まれないといつことは、そのジャンルの表現が

なくなるということの意味する。今はもう存在しない過去の化石になってしまふということである。

石岡に越してきて丁度十年が過ぎた。この十年間に眺めてきた石岡は、上昇のスパイラルが止まってしまっており、既成を突き破る突然変異が生まれることなく、生まれてもそれが伸びていく力を持っていないように見える。上昇のスパイラルが創られていない。螺旋をつくらず同じ水平軌道を回っているだけだといえる。

だからというわけではないが、私は身近にいる人達には、こう言っている。

「悪口だって大声で言えば、そこに陽が当たり、自慢話に生まれ変わるなる。小声は陰口にしかならず、そこに生まれるものは何もないと。」

八月、九月と連続してことば座で小林さんが「新鈴が池物語」をギター文化館の協力で、ギター演奏をバックに演じてきた。この新鈴が池物語を書くきっかけになったのは、三年前に石岡一校の生徒達が、夏休みの文化展示会を行った時、夜に怪談話をやるといふので、石岡にまつわる話を書いてあげようといふことで、伝説の裏物語として書いたものである。

これを小林さんのために朗読舞劇として脚色し、幾度となく演じてきた。そして、昨年、「しゅわーど」がつくばの力ピオで公演した時のことであった。おそらく石岡の人であるが、観劇後、私達が大切にしている鈴姫をこんな形にされるのは憤慨だ、と話すのを聞いた。

この時、私はこの物語を書き、舞台上に表現して良かったと思うことが出来た。これまで話題にも挙げる事がなかった伝説が、ようやく少し息を吹き返したと。

スパイラルのスプリング力が失われ、同じ軌道を回りながら、あやや回転の止まる直前に、スパイラルに伸びていくかは別にして、回転の止まることは一時にしろ防げたかな、と。

ことば座の十月の定期公演では、柏原池の伝説に新しい物語を与えた、新説柏原池物語を、常世の世の国は行方市浜が気に入って、埼玉から移り住まれたオカリナ奏者の野口さんとのコラボレーションで行なう。柏原池の伝説にもスプリングに反発力が現れてくれると良いのであるが、果たしてどうなるものか。

旧八郷町を含めた石岡周辺には、忘れられてしまった伝説が化石になって埋もれていくのを嘆くかのように沢山眠っている。私自身は、これらの物語に光りを当てたいという気持ちはないのであるが、小林幸枝といふふるさとの女優に演じさせたいなと思う物語や風景を題材に、彼女が舞い演技するものは全てふるさとであるとの思いで、ふるさとを想い、ふるさとを表現している。

文作屋なんて勝手な嘘八百を吐きやがる、そういわれることで、ふるさとを表現してみるのも面白がるうと思っているが、度の過ぎぬ程度に、とチョッピリ分別らしいことも思っているが、どうなることか。

さて、ふるさとをどう表現するかについても

う少し話を進めてみよう。以下に紹介する歌は、これもことば座十二月定期公演で小林幸枝さんが、舞つために書下ろした「里の舞い歌」からの抜粋である。

### 「風の涙」

あなたは何故 振り向いて下さらないのですか  
あなたは何故 木霊に返しては下さらないのですか

私の声は雑木林に引つかかってしまったのでし  
ようか  
私の声は風が搔つ攫って行ってしまったのでし  
ようか

風が泣いています  
木霊に心返すことがそんなに辛いことなので  
すか  
庭の鳳仙花だって指の触れたら明日の希望をパ  
チンと弾けて命の紡ぐのに

### 「舞い人」

私は舞い人  
常世の風につて 常世の時に漂い 古里を舞  
う  
ふるさとに風が流れて 時を紡いで 暮らしを  
舞う

### 私は舞い人

風に舞い  
時に舞い  
恋に舞い  
命を舞い

明日を紡ぐ

私は舞い人

私の舞いは風に吹かれて揺れる舞

私の舞いは移ろう時に背を押されて揺れる舞

何も考えず ただ揺れる舞

舞は私の言葉

舞の言葉は私の心

私の心は

風にゆれて

時にゆれて

恋にゆれて

私は舞い人

私に風を下さい

私に移ろう時を下さい

私に暮らしを紡ぐ恋を下さい

私は舞い人

私の舞は言葉

あなたは私の舞の言葉を聞いて愛を返して下さい

いますか

私はあなたの愛をもらってこのふるさとに夢を

舞いましょう

希望を舞いましょう

私は舞い人

“あなたへ”

あなた

恋瀬の流れが赤く染まったら あなたの涙を流

してくれませんか

あなた

恋瀬の流れが青く染まったら あなたの恋を囁

いてくれますか

あなた

恋瀬の流れが黒く染まった時 あなたは流れ星

になって私の願いを叶えてくれますか

約束をください

あなたが約束をくれたら 私は月になって恋瀬

の葦の影にあなたをお誘いいたします

あなた

まほろばの里が赤く染まったら あなたの涙を

流してくれますか

あなた

まほろばの里が青く染まったら あなたの恋を

囁いてくれますか

あなた

まほろばの里が黒く染まったら あなたは流れ

星になって私の願いを叶えてくれますか

約束をください

あなたが約束をくれたら わたしは黄金の実り

となってあなたの腕の中に眠ります

“そしてあなたへ”

私が今あなたを失ったら…

あなたの もう二度と私の前に現れないである

う美しい心を失ったら

私の、私を声する心も、言葉も、無用のもの

なってしまうでしょう

怒りも、喜びも、安静も無用のものとなってし

まうでしょう

私が今あなたを失ったら、あなたの心を汲む唇

も

意味の無い筒の入口になってしまつてしょう

実に陳腐で稚拙な歌だといわれればその通りである。何処にでも転がっている恋歌である。

しかし、言い訳をするつもりはないが、劇の文作屋がこつした歌を書く場合、文章としての歌を書く意識はない。これはあくまでも小林幸枝という女優がふるさとの暮らしの中に舞う歌なのである。

作家として本当に表現したい言葉は、小林幸枝という女優さんが舞いに声して演じてくれるのである。これは流行歌などの作詞にも同じことがいえる。

第一稿が書きあがったとき、舞本の最後にこのように書いて渡した。  
文中に「あなた」と書かれている部分を「ふるさとよ」という言葉に置き換えて、舞のイメージを組み上げてみてください。そうすることによって、あなたという恋人に呼びかける言葉に広がりができ、字面に書かれている既成を打ち破り、あなたでなければ出来ない里の舞が生まれてきます。…と。

ふるさとをどう想いどう表現するかは、自由である。しかし、ふるさとを想いそれを表現しようという意識や意志がなければ、こんな話はどうでもない他人事になる。スパイラルのスプリング力がへたるうが知ったことではないだろう。

私もこの地に十年も住んでしまった。一日でも暮らせばふるさととの考えも変わっていない。



寄り道や悪戯の敵討ちをされているようである。しかし、これがまた楽しく、嬉しいのだ。

長いトンネルを一人トボトボ歩く気持ちで、待っていると、ようやく眩しく陽を照りつける出口に到着。

「さあ、お楽しみ寄り道コースへ行く」  
上の孫たちにもそうしてやったように、「口」に寄って好きなものを注文し、一休み。心も休まる。

「美味しかった。またつれてきてね！」  
素直なげんきさで言う孫たちの声に、小さな町での幸せを感じる。

家路をめざす先に太陽が沈み始めている。最後の寄り道は二人の孫に主導権を握られた。

「ばあちゃんもやりな！」  
校庭のアスレチックに挑戦させられた。今まで眺めるだけと思っていたものだが、やってみると結構楽しい。楽しいが、やはり体力が長続きさせてくれない。直ぐに見物にまわってしまった。二人の躍動を眺めながら、こんな時間があったことを覚えてくれるだろうか、と感傷する。  
この二人に続く孫は五歳以下が五人もいる。あと十年はこうして遊ぶことが出来るはず。元気に遊び続けられるよう頑張らなくちゃ。  
夜、床に入っても昼間の心地よい興奮は覚めなかった。興奮の中で子育ての頃を思い出していた。

本当によく歩いたものだった。子供とお握りと牛乳を持って。行く先はその日の気分。タツプリ時間をとって歩いた。空になった牛乳瓶は

何でと思うほど重さを感じたものだった。でも必ず持ち帰った。ところが一度だけ。あの日はどうしてか道端の草叢にそつと隠しておいてしまった。

「あとで取りに来るからね」と言っただけだった。

あれから三十年が過ぎた今も未だ取りに行っていない。今も時々思い出したりするのだが、見に行くことも取りに行くこともしていない。

あの牛乳瓶はどうしているだろう。

春には土筆が芽を出すのを邪魔しただろう。

夏には夜露にぬれて光ったかな。

秋にはコオロギの宿になったかもしれない。

冬には霜柱の姿を映したかもしれない。

細い道の草叢の中に六つの牛乳瓶。車に踏まれ潰れたかな。見に行くのも怖いような気がする。でも何時かは行かなくちゃ。

涙が頬を伝わってきた。拭うこともせず流れるにまかせているうちに私は眠っていた。

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第4回公演

## 小林幸枝が『母の声オカリナ』に朗読舞！

常世の国の恋物語：第11話「新説：柏原池物語」は、オカリナ奏者の野口喜広氏を迎え、母の温もりの声に抱かれて、朗読に舞い、演じます。

＝ 10月21日（日曜日）午後1時半開場 午後2時開演 ＝  
（入場料：前売券2500円 当日券3000円）

柏原池に伝わる伝説は、龍神山に棲む龍が月明かりの夜な夜な美しい乙女となって池畔に現れ、若侍の命を奪ったのだという。しかし、新説柏原池物語では、佐志能神社の白い守り猫となって語られる。...ふもとの老婆は言った。「なんも、龍神山には龍なんちゃおらん。龍神山も昔はな、雷神山と呼んどった。誰が言い出したか、今じゃみんな龍神山じゃと思っとる。もともと龍なんちゃおらんに」...石岡市のシンボル龍神山にまつわる伝説に平成の物語が与えられ、新たな暮らしの物語が生まれた。小林幸枝が、野口喜広の奏でる「ふるさとの母なる土笛の風」にのって、明日の希望を舞と演技に表現します。

脚本演出 近藤治平

出演 小林幸枝 しらみひろぞ

オカリナ演奏 野口喜広

舞台装飾 兼平ちえこ

・発見を言葉におとして心に任舞う

風の塾「絵と一行文教室」から

日々の暮らしの中には意識されることなく忘れ去られてしまふ嬉しい発見がたくさんあるものです。そんな発見を、一日に一つ、いや一週間の一つでいい。一行の言葉におとしてみる。小さな豊が心に生まれるものです。

人は発見を意識した時、達成感とともに喜びを感じるものです。満足感も得られます。心に感動が生まれます。

日々の暮らしとはルーティン化されてあるものですが、そこからはマンネリと怠惰を運んできます。マンネリの怠惰になると一攫千金ではないけれど大感動だけを夢見るようになってしまいます。しかし、一攫千金も大感動も受動の心理ですから、待っていてもやってきません。私達の感じる喜びも感動も能動の心理の中に生まれてくるものです。小さな豊を心に育みその乗積則で大きな喜びや感動を自分の心の目で発見し、得てもらいたいと思います。

文章に上手下手はありません。下手があるとすれば、それは姑息な心です。(白井啓治)

・心は一〇カラット

・虫に食われている

自分も漆にかぶれたような漆の木

・雀の雨宿り はじめて見ました  
・蜘蛛の糸で隣りとながっています

(有村政子)

・巣立つ娘に元気で最後のケンカ

・コスモスの頃口ずさみ雑草抜く

・今日は一日洗濯機回ってます

・五羽の鳥一羽だけよそを見ている

(木村靖子)

・土手の草むらの中にてんと虫

・庭のすみに山百合の花自立たず気品があつて

・家の裏のどぶ川に真つ赤な守りガニ見つけた

・猛暑でも花壇の隅にピンクのふじばかまの花

(塚本さち)

え)

・愛犬がダイエット大成功 羨ましい

・待ち遠しいな山ももて果実酒初挑戦

・隣家の枇杷の実採る人もなくカラスのえさ

・お疲れ気味の紫陽花今年もありがとう

(野口節子)

・暑い暑いと麦茶一杯

・幸せ猫の毛づくろい

・朝露の中に下ノボが羽根を休めていた

・鮮やかに咲いた朝顔手折りて過ぎし日思ふ

(礼子)

・はらはらと涙で飾る夏の甲子園

・らっせらっせ鈴の音色と共に遠く響くねぶた祭り

・夕間に賑わつ虫の合唱楽しそう

(のぶこ)

・黄花の隠れてござる 夏草のかけに

・紅のいわし雲 幾重にも長く

・雨あがり 紫の中に二日月ひかる

・遊女が白粉を塗る時刻に咲くという花

・てんぐ草のそばにゆ草のそつと咲く

・人の辛さのわかる この半月のじつとして

(ゆめこ)

・声しても振り向く笑顔のなく

コスモスの一輪咲いて

・新米の食つて一年の知る

・心の病んで月明かりにコオロギ

・封を明けたらきみの声がいて

・君の背を抱いたら筑波嶺の霞に顔を隠した

・君に口づけをしたら龍がほえた 里村の静かに

・今年もこれで終りか太鼓の音

(はるを)

・聞こえるのは耳鳴りだけ 真夏の昏下がり

・泳ぐのは赤いカンチ 深緑の海

・森林の孤 群青の空 満月笑む

・鈴姫に涙して平成の満月里山に浮かぶ

・ねこじゃらしスキップスキップ孫の手に

(ちえこ)

柴間の月光の下に…

小林幸枝

九月二十九日、ギター文化館の前庭で「月光の下に朗読舞」と題して、特別公演を行なった。ギター文化館でも前庭を使つての夜の公演は、初めての試み。

私も野外での、しかも夜の本格公演は初めてのことで、どうなるのかと楽しみ半分、心配半分でした。

その日は朝から雨が降っており、夕方までには何とか雨が上がり、欲しいと祈っておりまして、午後には雨が上がり、月光の下とはいきませんでした。予定通り屋外での公演を行なうことができました。

雨は上がってくれましたが、今にも泣き出しそうな空模様と突然の寒さ。後半の「新鈴が池物語」に入った頃には、吐く息が白く見えるほどになってしまいました。演じている私には感じる寒さではありませんでしたが、半数の人がまだ半袖のシャツ。観客の皆さんにはさぞかし寒さが堪えたことと思います。

予想外は、寒さだけではありませんでした。当日は十五夜ではありませんでしたが、確か十七夜くらいだったか。それで明るい月明かりを考えていたものですから、ライトの光量不足。慌てて工用のライトを照らす有様。

企画当初は、薪能のように篝火を焚いてと考

えていたのですが、石岡の雨にたたられるお祭りも終わった九月の最後だから、月も明るく照らすだろつといふことで、劇団の応援スタッフもいないことだし、今年はず先ずはギター文化館でもこのように外で公演ができるといふデモンストラティブ的に考えてやるつといふことにしたのでした。

しかし、今年はず必ず雨が降る石岡のお祭りも夏の陽気で、一日の雨もなく、熱射病で倒れる人も出るほどでした。何時もの年なら雨の少ないこの時期に晴れ間がないのだから、異常気象を怨むしかありません。

一番気の毒だったのがギター演奏をしてくださったギター文化館の佐久間さんと成田さん。特に後半の鈴が池物語を担当してくださったフラメンコギターの成田さんは、益々寒さが強まってきた中で、指の動きが大変だったよつでした。「トレモロの部分が続いたよ」と嘆かれていました。お二人には、感謝感謝です。

いろいろな予想外があつたけれど、とても楽しい舞台がやれたと、嬉しい気持ちで一杯です。来年の事を言うのは早すぎますが、来年は予想外を蹴散らして、もっと準備万端に月明かりと篝火の中で、星たちに向つて思い切りの舞を演じてやるつと、また「目標を増やしています」。

十月の定期公演では、オカリナ奏者の野口さんを迎えて、近藤さんが石岡に越して来られて最初に書いた物語、「新説柏原物語」を演じます。新たな脚色で、劇中に「古今和歌集」の舞が挿入されました。

万葉集をギターに舞い古今和歌集をオカリナ

に舞う。毎回、新しい演出を考えてくれる近藤さんには感謝です。でも確り私のイメージを構築しないと直ぐに不機嫌な顔になります。今日の稽古ではチヨビリ不機嫌な顔。頑張りま〜す！

最後に野口さんのオカリナによせる言葉を紹介します。

生命(いのち)は土から生まれ、土に還る。オカリナ(土笛)、それは生命の記憶を呼び起こす母なる声」

野口さんは、演奏を開く時、その地の土でオカリナをつくり、演奏をすることが多いのだそうです。もしかしたら柴間の土のオカリナを焼かれたのだろうか。それとも龍神山か柏原池の土で焼かれたオカリナで、演奏されるのだろうか。ふるさとの母の声に舞い演技できたら、最高〜ッ！

ことば座は、ふるさと常世の国の「暮らしの歴史」を大切に考え、明日の希望を物語する劇団です。

### 朗読劇・朗読舞劇研究生募集中!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか。朗読とは演劇です。朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)ドラマを演じることです。ことば座俳優塾では、俳優術の基本である劇しく演じるための表現の心の構築について科学的イメージング法を通して指導していきます。

詳しくは、ことば座事務局0299-24-206

九月も終りに近い残暑の某日、スケッチに出かけた。恋瀬橋から紫峰の山を描いてみる。ゆらぐススキの穂と恋瀬の川面を銀色に染めてみる。

その日の目的は、筑波山が古代から変わらぬまなざしを注いでくれている石岡の台地の姿を描いてみたいと出かけてきたのでした。愛する筑波山を描いた後、恋瀬川の流れとほぼ平行に続くサイクリングロードに場所を移す。

刈り取られた後の稲穂の茎が柔らかい若葉色と黄土色の田園風景を前にして、石岡の小高い台地が東西に広がってみえる。

正面に見えるのは貝地の町並み。石岡の地に国府が置かれた時代、今の貝地は麻地(かいじ)として重要な物質、納税品の保管、書類その他の保管や倉庫が置かれ、多数の役人住居も建っていたといえます。

悠久四千年の中国、殷の時代の王国では貝をお金として使用していた。その後、万里の長城で有名な始皇帝が銅貨を鑄造。貝は清の時代には貴族階級の中で宝物として考えられていた。そんなこともあつてか「貝子」という高い地位の名称もあつたという。また、貝への漢字を見ると財、貨、贈など金銭に関係するものが多いことから考えても貝が貴重な宝物であつたことが窺えます。

貝地より東に目を移すと幸町、小目代。この辺りは大化の改新後、常陸国として誕生し十一

郡に分けられ、石岡は茨城郡の中心として郡衙といわれる郡役所が置かれたと推定され、郡寺であるといわれている茨城廃寺の跡が昭和五十四年からの調査で確認されている。飛鳥時代はこの辺りに五重塔がそびえたち、近くには金堂の鶏尾(しび)古代の瓦葺宮殿、仏殿の大棟の両端に取り付けた装飾も輝いていたことでしょう。鎌倉時代にはいると大塚氏によって外城(石岡城)が築城され、南北朝内乱期にはいり、戦いの場となつていきます。

更に東へ目を移すと、田島地区。今この地はバイパス道路建設にあつたの遺跡発掘調査が行なわれています。九月に十五日のこと、この発掘調査に体験参加することができました。関東ローム層をメートルばかり掘り下げると、千五百年前の生活の場が繰り広げられてありました。土間は他の地面よりも固くなつて形を残し、カマドには土器類が埋まつたままにある。今にも古墳時代の人々が住居に戻つてきそうな気持ちにさせられ、胸の高まりが止まりませんでした。

そんなことなどを思い出しながら貝地、小目代、田島地区の風景を色彩り終わる。スケッチブックを閉じる時、色彩つた風景から風が吹いてきて、石岡市教育委員会発行の「石岡の地名」に載つていた今泉義文氏説の文が思い起こされた。

「右岡という名の起こりは、一体何処からきているのであろうか。岡は、地勢上恋瀬川と山王川の流域に挟まれた一大高阜に在るので、納

得できるが、さて、それに関した「石」であるが、今の貝地町はもと岩城内と称した。その岩を転じての石でなかるうかと思つが如何であらう。石のように堅牢な岡とも解されるが何れであらう。

参考資料 「石岡の地名」石岡教育委員会発行

「貝地の昔話」平成十九年

「常総の歴史」産書房

・大地起こし逢いに行く 古の人に  
・重ね合わず古代のぬくもり

縄文土器にふれて

(ちえこ)

ことば座「風の塾」絵と一行文教室受講生募集中

(講師：兼平ちえこ・白井啓治)

ふるさとの風を色に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。絵の講師、兼平ちえこは、ふるさと風の会会員で、ことば座の舞台装飾を担当しています。絵や文に抱いている固定観念を取り払って、自分を楽しむことに一生懸命の教室には、何時も笑いが絶えません。「老いても青春」を主張し「常世の国の恋物語百」に挑戦する脚本家：白井啓治の「ちゃんと恋をしてる？」の話の下、箸が転んでも可らしい青春を絵と言葉の中に発見し、自分自身を褒め、楽しむ教室です。



過去の無い石

打田昇三

石岡小学校に隣接する民族資料館の入口手前に小さなお堂があって「風間阿弥陀（かざまあみだ）の表札だけが掛けてある。阿弥陀像と言つには勇気があるような奇妙な形の石で、古いことは分かるが事情を知らないと思議がられるだけで終る。この石は何なのか？多分、昭和六十年前後と思われる頃の「市報いしおか」に「ふるさと散歩道」という史跡案内コーナーがあった。偶然にその切り抜きから次のような紹介記事が見つかった。

「市民プールの脇道を約百メートル程入った左手に《風間阿弥陀》と呼ばれる石像物があります。昭和五十五年、市の有形文化財に指定されています。高さが約百三十七センチあり、五輪塔が崩れたような形をしています。元来、この阿弥陀仏は、小栗城（現在の真壁郡協和町市報掲載当時）の守り本尊として奉られていたものです。小栗城は、平安時代の久寿二年（一一五五）平重家によって築城され、地名の小栗を称して小栗氏となりました。

室町時代の応永三十年（一四三三）八月二日、十四代城主・小栗孫二郎平満重は、足利持氏との激戦で敗れ、小栗城は落城しました。阿弥陀如来像は、小栗十勇家臣である風間次郎正興、八郎正国親子が、三河に落ちのびる途中、府中平村別所（現在の千代田町下志筑 市報掲載当時）に、幼い四代目三郎正三と共に残してきました。これが風間家が代々守り続けて来た風間阿弥陀です。

時は流れて現在（市報掲載当時）は、十七代目を継ぐ風間秀元さん（六六歳）が管理者となつています。（注：以下、二重括弧は風間秀元さんの談話）

『神奈川県藤沢市に平満重と家臣の墓があります。そして今年の三月二十八日、協和町にある桂北山一向寺で、小栗十五代城主・小栗助重（判官）顕彰記念を盛大におこないました。協和町では、小栗家のことを知らない人がいないくらい有名です。』また、阿弥陀仏について、『佐竹氏の難を逃れるため、本尊は地下に埋没し、地上に粘土で固めた石質不明の像を作成したのが、この阿弥陀ではないか？』と風間さんは話をしてくれました。数々の難を逃れて来た「風間阿弥陀」は、「非業の毒殺」という惨事で有名な「小栗判官」伝説にも登場してくる大切な阿弥陀様です。

小栗城があつた協和町で小栗氏が有名なのは当り前のことで、別に石岡市民は知らなくて当然ではあるが、如何なる訳か石岡市が「有形文化財」に指定したとなると、市も由緒を説明し、市民も目を向ける必要があるだろう。そのため、二十年ほど前の「市報いしおか」で紹介したのだと思う。

記事にある室町時代の応永年間、石岡の府中城に居て現在の茨城県中央部を支配していた豪族・大掾（だいじょう）氏が水戸城などを失つて衰退を始めた時代になる。その原因となつたのが「上杉禅秀の乱」であり、同族の大掾氏も小栗氏も負け組に参加して没落したのである。

さらに、この事件の発端となつた場所は石岡市小幡である。その頃の領主・越幡六郎信親が軽い事務上のミスをした。大臣や役人の失言・失策が続く現代なら、お辞儀一つで済むところ、越幡六郎は簡単に領地を没収されてしまった。

心有る者は鎌倉公方・足利持氏の横暴に義憤を感じ、それが切っ掛けで争乱に発展した。

その辺の史料を採る過程で風間阿弥陀の記事が目に入ったので、無くなった市民プール脇の道を正直に百メートル行ってみたが阿弥陀堂は無く新しい家が建っていた。周辺を探しても見つからないので教育委員会の文化振興課に聞いて民族資料館にあると教えられた。本来の場所は私有地のようなから移動は仕方ないとしても、市の有形文化財で、嘘でも「大切な阿弥陀様」と公表したのに石の塊だけで何の説明も無いのでは社会保険庁のサービスと一緒にされてしまつたのではないか？そう考えて推測を巡らせてみると、阿弥陀様だけに阿弥陀くじのように関連する色々なことがあり、こうだ！と結論づける訳にはいけなくなつた。小栗城の守り本尊だった「風間阿弥陀」が奇怪な形の石一つというのは根底から怪しいし、もし何らかの事情があるなら説明が必要である。

まず「風間阿弥陀」というのは、石岡市民族資料館前に現存する石像物ではなくて、かつて小栗城内にあつた阿弥陀如来像（金銅製か木造かは分からないが）であるらしく、それは「市報いしおか」で風間秀元さんが証言しているように、「佐竹氏の難を逃れるため、本尊は地下に

埋没した。」ことになっている。その場所は何処か？素直に考えれば阿弥陀堂の在った土地である。その判断からか何年か前に掘り返されたようだが何も発見されなかったといわれる。

次に、長い間「風間阿弥陀」として伝えられてきた石像物であるが、これが隠された阿弥陀像の代替品なのか、或いは埋没の目印に置かれた（風間氏談話）石なのか、いずれにしても、その時代は戦国時代の末期、府中城落城の寸前で無ければ理屈に合わず室町時代にはならない。佐竹義宣の軍勢が府中城に攻め寄せて来たのは、水戸城を攻略したついでに思いつきで決めたのであり三日間しか余裕がない。その間に阿弥陀像を隠し、代わりの石を探して運び込み阿弥陀仏として祀ることは不可能だと思つ。何よりも室町時代から個人の所有物「風間阿弥陀」としてあつた正体不明の石がなぜ昭和55年になつてから石岡市の有形文化財に指定されたのであるのか？素朴な疑問も残る。

「ふるさと散歩道」以外に風間阿弥陀のことを記録している史料は少ないが、昭和六一年に石岡市教育委員会が出した「石岡の地誌」には数件が採録されていた。まず天明四年（1784）の「常府古跡案内するべ」は著者の山口仙榮という医師が元日に府中町内の神社仏閣をお参りする形式で書いたもの、これは市立中央図書館所蔵の別な記録（史跡保存会史料）と微妙に違つが「石岡の地誌」に従えば、「木の地稲荷、夫より雷電山西光院照光寺、浄土宗なり、当寺に常念仏あり、寺鐘ありて十二時を告る、更簾

（こうちゆう一時守り）は町中より養い置けり。

近年、四万五千日の大回向ありて参詣の人夥数

（かすつ 多い）甚だ賑わしく、又、当寺に二、

八月彼岸中説法あり、側に別雷の社あり。次に

梅窓院（明王山最勝寺）此寺の向民家裏に風間

阿弥陀というあり、高さ五六尺斗（ばかり）の

石にて怪しき形を刻めり、仏形にはあらず、堂

も無く濡仏也、癩（らい）を患うる者など焼餅

を捧て願を掛る也、是疑うらくは古人の墓印な

らん、或説に此所は雷電山の旧地也といへり、

夫より池の端を通り総社明神へ至る。」とある。

（注、「明王山最勝寺」は「常府古跡案内するべ」に

無く、「市立中央図書館史料」により補記、照光寺の

院号は西向院らしいが史料では西光院、四万五千日

は四万六千日と思われる。照光寺の記事は、この話

に関わりがありそうなので記しておく、詳細は別途

説明）

次に天明四年から6年程後に当時の府中町

年寄（町長）だった方が矢口数馬といふペンネ

ームで名所旧跡のことを書き残した「府中雑記」

に「…今、御陣屋の下の池を、上は池（うわいけ）

と云つ也、此地の北に尼寺先西寺と云号あり、

此辺に今土橋町風間何某と云者の裏に少の杉森

有て此地に古石碑あり、阿弥陀と云、今按ずる

に尼寺破壊の後、庵室をむすび、二僧居ける

か」とあるほか小栗から風間阿弥陀が最初に

到来したという「別所」については「…下志

雲（志筑）の地は慶長七年頃までは府中下雲と

所）の市川村の方に依て（近い場所に）阿弥陀の石像あり、香丸阿弥陀院支配す。」とあり、別所は大塚氏の飛び地で殿様の別邸が置かれていた土地のようである。

もう一件は明治四三年発行の「石岡誌（松倉鶴雄・編）中「祠宇仏堂」に「三、風間阿弥陀土橋町に在り、高さ六尺計りの石仏なりと云ふ、昔時此処雷電山の旧地なりと伝ふる者あり」と記録されている。

これらの記録から現在、民族資料館前にある石は、「梅窓院明王山最勝寺、此寺の向民家裏」に置かれていた。「寺向民家」というのが風間氏の屋敷であり、その関係で代々に亘り風間氏がお守りをしてこられたものであることが分かる。風間氏が住む前には、その一帯に幾つかの寺院が置かれていたのであろう。その場所には一時的だが照光寺も在ったと推定されるのである。

石岡市史による照光寺の縁起によれば「この寺は南北朝時代末期の応安7年（一三七四）に馬場系常陸大掾（たいじょう）氏七代目の高幹が鹿の子（常陸国分尼寺跡）に創建した。境内に鎮守の祠があり別雷神（京都、上賀茂神社祭神）を勧請したので山号を雷電山と称した。創建から約二百年後に佐竹義宣の軍勢が府中城を攻略した際に鹿の子も戦場となり、照光寺も焼けた。その後、佐竹義宣の弟（佐竹佐衛門尉）が寺の焼失を悔いて本山から上人を招き、鹿の子から現在地に移して再興した。その地は府中六名家の一つ・香丸氏の宅地後だといわれる。」ことにな

っている。

余計なことだが、石岡を支配し照光寺を再興した佐竹佐衛門尉義尚は、佐竹義宣の弟にあらず、佐竹系譜では叔父になっている。それも幼い頃に他家の養子に出され、戻って来て一族家臣の家を継がされた人物である。佐竹義宣は何処かの国にいた総理大臣のように他人の意見を聞かない性格で、水戸城が欲しいから奪い「ついでに府中城も攻めよう」と攻めて来たのである。甥ながら主君である義宣が寺を焼いてしまったので、府中の管理を命じられた佐竹義尚が個人的感情から罪滅ぼしに照光寺を再興した訳で、佐竹氏再建とは言い難い。

佐竹義尚は、大掾氏の残党が潜んでいるかも知れない府中の町を何とか穏やかに治めるためにも焼いてしまった照光寺を再建したい。しかし佐竹氏は合戦続きで資金がない。ここでは書かないが佐竹義宣が強盗まがいで資金調達をした話が石岡近辺に伝わっている。義尚は水戸に「お金頂戴」とは言えず困って居た時に飛び上がるような情報が入ってきた。大掾氏の領地だった田余村に同じような寺があるという。調べると府中の照光寺とは双子の兄のような寺で戦火に焼け残っていた。早速、無理矢理に解体された本堂などが府中に運ばれ土橋通りの南側、府中城上池の辺に仮の照光寺が建てられた。そこで風間阿弥陀のことを考えてみると、鹿の子で焼かれた照光寺が再建された後も（恐れていた佐竹氏が大掾氏創建の照光寺を保護することが分かってからも）慶長年間から昭和末期まで

現在の形で土橋町に存在していたのであるから「佐竹氏の難を逃れるため、本尊は地下に埋没し…」説は怪しくなってくる。

回りくどい言い方だが、少し整理をしてみると、まず小栗城の守り本尊で、落城に際して風間氏の祖先が持ち出したという本来の阿弥陀像は、一族が別所経由で府中に定住した後、どこかの寺に預けられたのではないか？単純に考えれば「石岡の地誌」に記録されている「梅窓院（明王山巖勝寺）」又は「尼寺・先西寺」若しくは大掾氏に寄託されて「鹿の子の照光寺」になり気なく置かれたのではないか。梅窓院は廃寺となり、照光寺は兵火に罹っているから所在は不明とする他は無い。深く考えるならば落城に際し小栗城から持ち出せなかつたか、或いは現地の小栗氏菩提寺に隠した？最初に着いた府中領の別所に隠されたという見方も出来る。いずれにしても証拠はないが、事情はどうでも守り本尊阿弥陀像を埋めて隠すという罰当たりな手段は取られなかつたと思いたい。

次に「風間阿弥陀」として現存する奇怪な形の石は「常府古跡案内するべ」で江戸時代の地元歴史研究家・山口仙榮が伝え、また「府中雑記」にも記録されているように、古くから（年代は特定出来ないが）梅窓院又は尼寺にあった昔の誰かの墓石であろう。梅窓院は「暴れん坊將軍・徳川吉宗」の時代頃までは住職が居た寺らしい。かつて、その付近は石岡の古代豪族であった香丸氏の屋敷跡とする石岡市史の説に従えば名族の墓碑と言えないこともない。ただ香

丸氏は藤原鎌足の出身族である大中臣（おおなかとみ）系が絶えて、途中から大掾一族が名跡を継いだようである。どうも小栗城とは関係が無くならずうだが「…（風間阿弥陀と呼ばれた石に）癩を患うる者など焼餅を捧げ願を掛る也…」とする記録の残ることは、次に述べる小栗判官伝説による熊野本宮の業病平癒のための聖地巡礼と関わりがありそう、小栗判官伝説の影響が残ることになる。ただし、それは一時期の日本仏教界に流行した浄土教信奉者、特に時宗門徒による説教話により伝わったものと考えられ、小栗落城に伴った仏像の隠匿騒動が石岡に有ったかどうかは疑問と言わざるを得ない。そうは言っても折角、当事者が苦勞して石岡市有形文化財に指定したものを「只の昔の墓石」と言う訳にもいかないので、少し長くなるが「小栗城と小栗判官伝説」の関わりから石岡に「風間阿弥陀伝説」が伝えられた経緯を推測してみたい。

起源は平安時代にさかのぼるようだが室町時代の末期に起こった宗教色の濃い芸能に「説教浄瑠璃」又は「説教節」というのがあった。民衆に仏の功德を教える目的で主に「因果心報、生死無常」などを説いて回った説教（辻説法）に鉦（かね）、三味線、鼓弓などが加わったもので、その代表的出し物が「をぐり判官（はんが）ん：小栗判官」である。判官とは大宝律令以来の高級役人の等級で長官、次官、判官、主典の四等級の三番目、石岡ゆかりの大掾氏が世襲した「大掾職」が判官であるから、大掾一族である物語の主人公・小栗某も判官と呼ばれるので

ある。もし判官を「ほうがん」と呼んだ場合は司法警察の検非違使の尉(けびいしのじょう)を指すことになる。源義経がそうである。

説教浄瑠璃・小栗判官の主人公・小栗判官兼氏(又は正清)は三条高倉大納言兼家の嫡子になっている。小栗荘の本領主は九条家や一条家だったから中間で三条としたのである。これは飽く迄つくりばなしである。小栗兼氏がある女性と知り合ったら、それが大蛇の化身の龍女だった。やっと別れて次に知り合ったのが照手姫、ところがこの女性も日光山に住む神様の娘で人間が神の娘を誘惑するのはケシカランという理由から親の神様に判官兼氏が毒殺される。地獄の入口まで行った小栗判官はパスポートの不備からあの世へ行けず閻魔大王の命令で生き返る。一方、照手姫のほうも罰として追放され人買いに捕まって箱車を曳く重労働に従事させられている。或る日、照手姫の車に「餓鬼阿弥(がきあみ)」が乗ってそれを熊野本宮まで運んだ。その客の餓鬼阿弥が地獄から戻って来た小栗判官だったが照手は気づかず判官も分からなかった。餓鬼阿弥というのは蘇生する途中の、生気の無いものことらしいが、それが転じて「癩の患者」を意味するようになったとか、その患者が土車に乗って聖地巡礼をした習俗があったと伝えられる。この物語では、結果的に小栗判官が熊野本宮で蘇生し、元の身体に戻って照手姫と再会するのだが、説話の根底として幾つかの要素が推測されているようである。それは、熊野山中で行われる修験道に業病患者蘇生の加持

祈祷があったこと。熊野権現のご利益を礼賛する話が諸国遊行の僧により伝わったこと。物語の類型である貴種流離譚(きしゅりゅうりたん) 大國主命、山幸彦、日本武尊らの英雄が最初は苦勞する話)の筋立てになっており、その形で広まったことなど。

熊野は神武天皇が敵の毒ガスにやられて一度死に、鹿島神宮の建瓴槌命に助けられ蘇生した場所である。その時にお手伝いしたのが小美玉市倉敷に祀られている潮宮(いたみや)神社の祭神・高倉下(たかくらじ)という神様であるから潮宮神社の木の根露わな参道が何となく熊野古道を思わせる。神武天皇が復活した場所に因んで小栗判官が熊野で蘇生する話がつくられたのである。

古い時代から巨石信仰、補陀落浄土(観世音菩薩の住処)、西方浄土(阿弥陀の聖地)として崇められた熊野は、日本の夜明けとも言える壬申の乱(じんしんのらん)では伊勢(神宮)と共に早くから天武天皇(大海人皇子)側に味方して新興朝廷との繋がりを深めた。因みに小栗氏の宗家・大掾氏に常陸国を譲り都へ行った桓武平氏が中央政界に進出する基盤としたのは伊勢の国である。

ところで鎌倉時代、室町時代、南北朝時代にかけて没落した地方豪族(武士団)は大勢いるのに、なぜ物語の主人公(モデル)が小栗氏なのか?その原因として考えられるのは次に挙げる幾つかの理由である。

小栗氏の菩提寺は筑西市に現存する一向寺

である。現在は浄土宗(照光寺と同じ)であるが、落城の当時は時宗(じしゅう)の寺であった。この寺は天神堂という神社だったといわれる。そこへ諸国遊行を続けていた時宗一向派開祖の一向上人が立ち寄り、桂北山一向寺という寺にしたと伝えられている。時宗の総本山は藤沢市にある清浄光寺(しょうじょうこうじ)であるが、この宗派は遊行(ゆぎょう) 念仏を唱え、南無阿弥陀仏と書いた紙片を配りながら諸国を巡り歩くを基本としており開祖・一遍上人は寺を持たなかった。藤沢に本山を置いたのは四代目・呑海上人とされ、清浄光寺は遊行寺とも呼ばれる。従って本山と地方寺院との関係が他の宗派よりも密接であり、菩提寺・一向寺を通じて悲運の

武將・小栗満重のことは藤沢にも知られていた。小栗領は、藤原一族から伊勢神宮に寄進された領地であり、小栗氏は代々に亘って地頭として現地の荘園を管理してきた。伊勢と熊野は極めて近い関係にあり、小栗領内は熊野信仰が盛んな土地柄であった。また先に述べたように遊行に励む一遍上人が本来の悟りを開いた場所が熊野であるから、時宗の聖地である熊野の伝説に小栗氏が登場するのは自然の成り行きかも知れない。大掾氏は小栗氏の宗家であり、大掾満幹と小栗満重は戦友でもあったから、時宗の念仏僧又は浄土宗の念仏僧に依って創られた布教の説話が石岡に伝わり定着したことは十分に考えられる。「風間阿弥陀」もその一例とみるべきであろう。

一遍上人は武士であった。先祖は源頼朝の源

氏再興に先駆けて協力した四国の豪族であり、鎌倉幕府執権の北条氏とは縁戚関係にあった。承久の乱（後鳥羽上皇による幕府打倒計画の失敗…一二二二）では、北条氏に反して没落したが一遍の代には領地を回復していた。僧になったのは一族の相續争いを嫌ったからである。諸国を回った一遍は当然、常陸国へも来ており藤沢に置かれた道場を水戸に置く構想もあつたと伝えられるから常陸国は時宗と縁がある。さらに北条氏は大掾氏や小栗氏と同じく桓武平氏を称しており、源頼朝夫人・北条政子の妹が一遍上人の祖母に当るから小栗氏は時宗から親近感を持たれる。

小栗城は応永三〇年（一四三三）に鎌倉公方の攻撃で落城し小栗氏は滅亡したが、息子の小栗助重が都の將軍に仕えて再興した。しかし十七年後には再び落城している。最初の敗戦は石岡の大掾氏と一緒に「上杉禅秀の反乱に加担したため」であり、二度目は助重の時に「結城合戦で幕府軍として戦い、結城氏に城を攻められた」のである。未だ城が完全に復興していなかった所為であろうか、折角「勝ち組」に加わっていたのに残念な落城であつた。最初の小栗落城の際に小栗満重が自害した説と三河へ逃れた説がある。この場合なぜ三河へ逃れたのか？当時の三河は室町幕府重臣の領地であり反乱軍に加担しても個人的に小栗満重を庇ってくれる人物が居たのかも知れない。また三河には一遍上人に帰依する武士団も居たと推定されるから菩提寺の縁で小栗から逃れて来た満重を地元の信徒が

匿うことは可能ではある。二度目にやられたのは小栗助重だが、どうも関東近辺に潜んでいたようで、寛正五年（一四六四）正月九日没、享年六十七歳と歴史書に記録されており、さらに助重にも落城に伴う物語が伝わるのは諸国を回つた時宗念仏宗と熊野信仰者による説教話の威力であろう。

ついでに触れておくが大掾氏は小栗落城の時に京都の將軍の命令で城の外側に居て戦闘の状況を観察し記録していた。本来、同族で同志なのだから、救援に向わなければならないのだが、禅秀の乱で公方に降服したばかりなので動きがとれない。將軍と仲が悪い公方が大掾一族を攻めている様子を涙を堪えて見ているしかない。「寄せ手の八十人がその場で討たれた。怪我人はその数が分からない程多い。城方は戦死者が一人だけである。」大掾満幹が將軍に出した報告である。明らかに攻撃軍の恥を暴露している。これが公方の目に留まつたから六年後に満幹も鎌倉で殺された。風間阿弥陀（の伝説）を石岡に伝えた一族は、この時の大掾軍に紛れて石岡へ来たのであろうか。

時宗総本山・清浄光寺の裏に「長生院」という小さな寺（元は閻魔堂）があり、そこに小栗判官満重と、その妻とされる照手姫に關わる肖像画、仏像、木像、縁起書、名所図絵などが保存されている。落城に際し満重が生き延びたとしても三河へ来てからは三年ほどで病死したようである。残された照手姫は長照比丘尼と名乗る尼僧となつて満重の菩提を弔った。十数年後に照手

姫も他界し法名を長生院寿仏坊と称した。これは長生院に伝わる話である。

その他に時宗総本山に伝わる小栗判官と照手姫の話があり内容は説教浄瑠璃の話の筋に似ている。どちらが先かは分からず、その当事者も小栗満重ではなく息子の小栗助重だとも言われるから、これを史実と決め付ける訳には行かないが有りそうな事件で、その内容は次のようなものである。

公方側の執拗な攻撃で小栗城の最後も決定的となつたある夜、周りは鎌倉の軍勢に囲まれていた。折からの闇を利用して城主・小栗満重は十勇士を伴い城を脱出し小貝川の岸辺に出た。

さて風間阿弥陀の伝説では、ここで風間某が阿弥陀像を背負い府中平村まで来る訳だが、懐に入るような仏像ならいざ知らず、小栗城の守り本尊ならある程度の大きさがあつた筈で、それを持つて城を抜け出るのは難しい。十勇士が守るべきは主君の身であるから余計な事はしまい、隠して置いた小船で利根川まで下り、木下きおろし）の岸に着けてから下総の鎌倉街道沿いに武蔵、相模を抜けて三河を目指した。いずれも敵地だから昼は森に潜み夜道を辿る。敵の本拠地・鎌倉も無事に越えた。思えば何年前前には大掾満幹、山人與義、越幡六郎らと鎌倉に馳せ参じ上杉禅秀の乱に加担していた。それが小栗氏衰退の原因だったが後悔はしていない。

主従はようやく藤沢までやってきた。ここには小栗氏の菩提寺「一向寺」の総本山遊行寺がある。門を叩けば喜んで迎え入れてくれるであ

ろつが、それだけに敵の手が回っていることも警戒しなくてはならない。どこか休める場所は無いであろうか、家臣が付近を探すと遊行寺から少し離れた野中に一軒の大きな家があった。そつと様子を調べにいった家臣が戻つて報告した。

「殿、どうやら遊行寺を訪れる念仏集團の宿のように見えます」

「それならば、一同、念仏を唱えて本山に詣る田舎者に成り済まそうではないか。各々も念仏の心得はあるつ」

「幸い、我等が着ております衣服も汚れて破れも出ておりますれば、言葉使だけ気をつければ下総辺りの百姓に見えます」

城から持ち出した金目のものは懐深く仕舞い、籠手、脛当てなどは外して衣服を寛げ、武士を思わせる物の無いのを確かめてから一同は宿の戸を叩いた。

「へい…」返事と共に現れたのは主らしき男である。

「わしらは下総から来た念仏講の者だが、御本山が一杯で泊めて貰えねえだ。何とか一晩厄介になりてえと思いやして…南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」

家臣の一人が精一杯の演技をすれば主従、これに和して念仏を唱える。

「それはそれはご奇特なことで、丁度、部屋も空いておりますから、どうぞ、お入りください。何人様でしょうか…」

「十一人であるが…」どうしても武士の口調

になるのは致し方のないこと。案内された部屋には灯りが点り程無く酒肴が運ばれてきたが、手際が良すぎることに一同は気づかない。いつの間にか数人の女性が現れ、愛想良く盃に酒を注いでまわる。主が「さあさあ、酒は幾らでもありますから」と声をかけるが、その目は客の懐のふくらみに向けられている。

野宿続きでろくな食べ物を口にしていなかった一同に酒の香りは強烈である。女たちに勧められて一気に飲み干している。さすがに小栗満重は慎重に盃を取り上げた。その時、傍らに控えていた女性がわざと注ぎ足すふりをして満重の膝に酒をこぼした。

「あつ！これはとんだ粗相を…」女は懐から手布を取り出し、満重の衣服を拭きながら「毒が入っています！」と小声で告げて席を立った。

「えつ」思わず盃を口元から放すと、目ざとく見つけた主が近寄ってきた。女は離れ際に目配せで満重に何か合図をしたようである。女の言葉は気になるが主の手前、飲まなければ怪しまれる。用心のために少しだけ舐めてみたが味も香りも酒に変わりはない。つい油断をして残りの酒を飲み干してしまった。

翌朝、懐から貴重品を抜かれた十一人の死体は、少し離れた野原に捨てられていたのだが、明け方に遊行寺の上人が閻魔大王の夢のお告げを聞いた。

「上野が原に十一人が死んでいる。賊に毒酒を飲まされ金品を奪われた落ち武者だが、主の小栗満重だけは辛うじて息を吹き返す。それを

熊野に行かせて温泉での療養を続けさせれば回復するであろう…」

目覚めた上人が寺僧を連れて上野が原に行くと言った。閻魔大王のお告げどおり十一人が転がっていた。一人だけ微かに身体の温もりのある者を寺に運び蘇生させて残りの亡骸を葬った。一同が泊まった家は金品を奪う盗賊の巣であった。

満重に「毒酒」を知らせた宿の女は「照手」と言い、武士の娘だったが家の没落で人買いの手に入り盗賊宿に売られていたのである。満重が生き返ったことで主に疑われ見せしめに海に投じられたが漁師に救われ、辛苦流浪の末に熊野へ辿り着いて療養中の満重に再会し献身的な看病で満重を元の身体に戻す。やがて照手と共に相模国へ来た満重は盗賊を探し出して家臣の仇を討ち、照手を妻にするという物語である。この話は熊野権現のご利益を伝える説話として、遊行寺を本山とする時宗の僧侶たちにより諸国に広められたらしい。

伝説は伝える環境も大事だが登場する人物も魅力的でなければ伝わらない。照手姫に相当するモデルがいたかどうかは不明だが、小栗満重は常陸の一豪族ながら、権力を振り回し時に理不尽な政治を行う鎌倉公方・足利持氏に最後まで抵抗し続けた武將として庶民に人気があったと思われる。

小栗判官と照手姫の話に、主人公を満重の子で二度目の小栗落城で戦死した小次郎助重とするパターンもある。それによれば、盗賊宿で毒酒を飲まされかけた際に遊女・照手の忠告を聞

いて酒は飲まず、隙を見て裏庭に繋がれた馬でその場を逃れ藤沢の遊行寺に駆け込む。この馬は盗賊が盗んできたのだが荒馬で乗りこなす者が居なかった。小栗助重を無双の乗り手としていた。小栗氏の菩提寺（一向寺）には助重の墓があり、並んで照手姫の墓と鬼鹿毛という名馬の墓もあるらしいから、こちらの話のほつが本当らしいが、藤沢の長生院には満重と照手の遺品がある。温泉饅頭の本舗争いと同じで、是だと断定は出来ない。それが歴史の面白さでもある。

一向寺のある旧小栗領の井出姥沢(いでえびさわ)という集落に、今は廃寺となった夫照山太陽寺(ふしょうざんたいようじ)という時宗の寺があった。照手姫の守り本尊と言われた寺で、協和町時代に文化財に指定された九重多層塔と五輪塔が残っている。小栗満重・助重父子が寄進したと伝えられているが、一説には小栗判官の墓だとも。この多層塔は花崗岩で高さ一丈三尺二寸(四m弱)、「碑面文字なき故真偽詳ならず」と雖、数百年を経し古碑」と古書に記録されており、石岡の風間阿弥陀(とされる謎の石)の存在と似ている。

話を照光寺に戻して、田余と府中に同じ様な寺院を開基したのは浄土宗の開祖・法然上人の四世で浄土宗名越(なごえ)流を開いた良弁という上人であると伝えられている。小栗氏や大掾氏が没落するキツカケとなった「上杉禅秀の乱」では小栗、大掾、山入、真壁、越幡などの武将と共に決起した集団に「常陸名越」の名が

ある。根拠の無い推論ながら、常陸国の南部・中央部を抑えていた豪族の大掾氏は、良弁上人に帰依して照光寺を玉余と石岡に建立させたがその寺は大勢の門徒勢力を擁する名越流の拠点だったと推定される。その名越衆は、横暴な鎌倉公方に対する常陸武士団の抵抗に協力した。同様の動きは小栗城下の寺にもあったと思われる。当時の室町幕府將軍は、鎌倉の専横を憎んでいたからクーデターは成功する見込みだったが、京都の幕府重臣たちの思惑から事はならず武将たちは没落、負け戦で多くの門徒が命を落とした。奇妙な石塔はその無名の僧兵及び念仏門徒たちの鎮魂の碑ではないだろうか。

執念深い鎌倉公方に浄土宗が迫害されることを案じた小栗氏も大掾氏も供養塔には何も文字は刻まなかった。小栗の夫照山太陽寺は時宗の寺に替ったため、照手姫の菩提寺として誤魔化すことが出来た。大掾氏の場合は鎮魂碑を最初から鹿の子の照光寺には置かず、古代の豪族・香丸氏の名跡を継いだ大掾一族の屋敷内に置いたのである。皮肉なことに、その碑は府中に逃れて来た小栗の遺臣たちによって「風間阿弥陀」と名付けられてしまったが、鎌倉公方も都の將軍に追討されてしまったので迫害の心配は不要になった。

過去が急速に消えてゆく時代の激流の中では「風間阿弥陀」と名付けられた石の素性を確定すべき手段は無いと思わねばなるまい。建造物は勿論のこと、山も川も神社も寺院も丘陵も、地名も史跡も生まれ育った町村さえも温暖化で

融ける氷河のように消えてゆく現代では、せめて過去の話だけでも記録しておかなければ地域が歴史的認知症になってしまふ。そう思って「風間阿弥陀」の戸籍を調べてみたのだが、既に手遅れであったようで悲しい。…南無阿弥陀仏

### 歓迎せざる終生の供

白井啓治

こ奴めを終生供に連れ歩かなければならなくなつて十七年、いやもう少しなるだろうが。当初は厄介な奴を供につけることになつたなと宿命を怨んだが、怨んで捨てることができるわけではない奴であるならば、居なくてはならない供だと受け入れてやるしかない。こ奴めのこと、できの悪い弟子のようなものだと思っている。

何人かの弟子を受け入れたが、優秀な弟子は直ぐに巣立つていく。こちらから盗めるものを盗んだら、さつさと出て行ってしまふ。当然のことだ。自分を構築しない限り、師匠の真似をしていても仕事があるわけではないからだ。誰にもない自分を持たなければ、誰も相手してくれないのが表現の世界である。

私は特別師を持たなかつた。周りの者が皆、敵のようなものであり、また師の様なものであるから、特別心酔するような人もいなかったこともあり一人で歩いてきた。だから、弟子のよいうな形で受け入れてもこちらから特別教えることもしなかつた。伸びる者は、こちらが手を貸

さなくても伸びていくし、教えたからといって身に着くものでもない。居候を一人置くといった按配であった。

ところができの悪い弟子というのは、居候に安住するわけではないだろうが、腰を落着けた弟子は七年であった。女性であった。彼女は、私の書齋事務所に誰かの紹介でやって来て、結婚をし出産するまで腰を落着けてくれた。脚本とは違つ分野ではあるが未だに仕事をしている。そろそろ孫が出来るころである。時々電話をくれるが、その度にヤレヤレと思う。「先生、これ私書けない。どうしましょうか?」「俺はもう仕事は辞めたんだ。自分で考えろ!」そういうながら、穴を開けたら困るだろうと思つて、構成を立ててメールに入れてやる。あけすけで遠慮のないところに何時も負けてしまう。結婚当初、今月家賃払えない、と言つていたのと今も余り変わらない。

終生供にしなければならなくなったこ奴めは、紹介者もなく勝手に、しかも知らぬ間にやつて来て私の中に住み着いてしまつていたのである。こ奴めの正体は「糖尿病」である。こ奴めが住み着いたことを知つたのは、作協から年に一度はドックに入つて自分を知ろう、との誘いで一泊のドックに入ったときであった。隠れ糖尿病であったのだ。空腹時の血糖値は全く異常が見られないのだが、負荷試験での血糖値が異常に高かつたのだ。ヘモグロビンの数値も高かつた。

糖尿病の知識はある程度持つており、離婚して間もなくの時期でもあり、一人暮らしで重度の糖尿病になり合併症で苦しむのは嫌だと、それまで浴びるほど飲んで来たアルコールもブツツリ止めた。食事は、もともと自分でつくる事が好きであつたので、苦もなく節制生活にはいつたのだった。

石岡に越してくるまでは、こ奴めはおとなしくしていたのであつたが、こちらの年齢につけて込んで居候のくせに次第に自己主張が強くなつてきたのである。

六年ほど前から、食事のコントロールだけでなく薬を服用し始めた。三年ほどは効果がきめんに現れ、供の奴めもおとなしく鳴りを潜めていたのであるが、こちらの加齢につけ込むかのようにまたぞろ大きな顔をして遠慮なく胡坐を書くようになってきたのである。

何度か薬の量を変えて叱りつけてきたのであつたが、昨春秋ごろからヘモグロビンの数値が上がりだしたのであつた。

丁度その頃に、女優の小林幸枝さんと「ことば座」を立ち上げることにになり、彼女に「常世の国の恋物語百」を書き上げる約束をした。しかし、百の物語を書き演じるとなると、どんなに急いで十年は必要となる。

約束を守る、を旨とする小生にとつてこの先の十年は確たる保証はもてない。それで、今年一月にインスリン注射によるコントロールに切り替えることにした。一病息災とはいわれるが、この供の奴めはこちらが黙つて勝手を許してい

ると、歓迎せざる仲間を一緒に暮らすと呼び込んできてしまつ。こ奴を終生供にするのかと思つとつんざりするが、こ奴を抹殺する妙薬も妙法もあるわけではない。勝手を持ち込まないようになだめながら終生供にするしかないのだ。

#### 編集後記

あちこちで桜の花の狂い咲きのニュースが報じられている。異常気象の所為だとは言つが自分の生活だけは今を維持したいと勝手を思つてしまつ。これでは温暖化による異常気象は止まらないだろう。今朝庭に出たら我家の桜も三つ咲いていた。時々、事務局宛に会報の応援を伝えてくださるお手紙を頂く方がおられます。この編者が恋の話ばかり書いているものだから、一度紙面に私宛の恋歌を、と言われてしまいました。それで、未だ見ぬ貴女ですが編者の独断で一文を。

・恋唄き鳥きみの谷水をくみて生命の紡いで  
・この花の名は 何だか淫らに女子の隠しどころ  
恋歌というよりは異常気象に狂い咲きした艶歌になつてしまいました。

これに懲りず今後とも宜しく願ひいたします。

#### 編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)